

2019年2月4日

都城市 池田宜永殿

「国際記念物遺産会議（ICOMOS）」の都城市民会館取壊しの危機に対する警告

「20世紀遺産に関する国際学術委員会（ISC20C）」を通して「国際記念物遺産会議（ICOMOS）」は、都城市民会館の取壊し危機に置かれているという状況に対し警告を示します。

宮崎県都城市に位置する都城市民会館は20世紀の日本で最も著名である建築家菊竹清訓（1928-2011）の作品で、1966年に竣工した建物です。他に類を見ない印象深い造形と力強い存在感を持つこの建築は都城のシンボルです。また経済的・技術的発展を大きく遂げた高度成長期である1960年代の楽観的かつ野心的な精神を感じられる大変貴重な遺産です。メタボリズム・グループは、建築と都市が自然や社会と同様に新陳代謝（成長・変化）していくものと捉えることを通じて、建築や都市のあり様を提示しました。都城市民会館はその希少性が高いメタボリズム建築の歴史的な作品のひとつとなっています。

ICOMOSは、メタボリズムの建築が第二次世界大戦後の日本において発展・復興に対して大きく貢献していると認識しています。インターナショナルなスタイルを持ち、そのコンセプトや着眼点は特に日本的な特色を持っています。都城市民会館はメタボリズムを明確に体現しています。この大胆な造形は建築的試みが社会において認められた日本の高度経済成長期の時代を反映しています。

現在の保全状況に対し、躯体の保存状態は全体的に良く、取り壊しは受け入れることが出来ません。持続性促進のため、そして遺産の運営と保存における望ましい実行のため、解体・取壊しではなく再利用を考える必要があります。

多少の修復は必要ですが、都城市民会館は建築的な価値を未だに失っていません。取壊しが日本の建築的遺産の損失となるだけではなく、世界的な文化的遺産の損失ともなるでしょう。取り壊しは、先見性があること、また豊かな創造力、持続可能性（サステナビリティ）の精神に反することになります。傑出した革新的な作品を復活させ守ることは、持続可能性（サステナビリティ）の時代においてさらに大きな意味を持つでしょう。

ISC20Cは日本における適切な権威者に都城市民会館のあらゆる解体計画を停止し、ICOMOS Japanと国際的な専門機関と意見交換やアドバイスを要求するべきであると強く主張します。

これに反する場合、ICOMOSとISC20Cは全面的に国際的遺産警報（ヘリテージアラート）を出す準備があります。これは都城市民会館が日本だけの問題ではなく、国際的に文化的遺産であると断言できるからです。

ICOMOS/ISC20C 委員長 ガニー・ハーボエ